

21世紀の戦記から読み取るパースペクティブ

Perspective read from 21st centurywar record written

by soldier in World War II

篠原真史

要 旨

戦後50年が過ぎ21世紀を迎えたころ、戦争体験者による手記、戦記の出版が増加するようになる。この戦記の特徴は、下士官や兵だった者が事実を「ありのままの戦場の現実を伝えることが慰霊であり、追悼であるという意識¹⁾」から戦争の現実の姿が記されるようになっていく。本稿は2016年に提出した修士論文をもとに、戦場や部隊を「規範の内面化を通して生じる」準拠集団としてとらえ、その根底にある「人間の、自らの世界に体系化されたものの見方」²⁾であるパースペクティブを読み取ることを課題とした。これはシカゴ学派のタモツ・シブタニが1955年『パースペクティブとしての準拠集団』としてまとめたものを理論の支えとしたものである。そして、指導者への不信と怒りに支えられた平和主義と非人道的な行為の自省という2点を改めて確認した。これらのパースペクティブは、著者のみならず過酷な経験を経た戦争体験者の多くに通ずるものであり、戦後の社会の世論を形成するものであると考える。

キーワード：パースペクティブ、準拠集団、戦記、アジア・太平洋戦争

いるものとする。

1. はじめに

平成30年(2018年)は明治維新から数えて150年目を迎えた年であった。アジア・太平洋戦争に敗れた昭和20年(1945年)から数えると73年目であった。昭和20年以前の77年は、台湾出兵、江華島事件に始まり、日清、日露の戦争、第一次世界大戦と常に大陸への派兵を進めていた。私たちはその時代を戦前・戦中と言う。とりわけアジア・太平洋戦争は、厚生労働省の推計で310万人、軍人・軍属だけでも230万人の死者³⁾を出している。生き残った人々の“思い”は個人や日本の社会にどのような影響を与えてきたか、問い直す時期を迎えて

戦争の体験は、敗戦後しばらくして戦記ものとして出版されたり、70年代以後、様々な形で証言されたりして公にされてきている。『「戦記もの」を読む』を著した高橋三郎は、次のように戦記ものの刊行の様子を分析している。戦記ものは内地で召集解除を受けた者がいち早く書き始めてきた。この中にはインパール作戦を指揮した参謀辻政信の文章も含まれている。

刊行数がピークを迎えた戦後10年目あたりには、戦後の混乱が収まっていくなかで、戦争帰還者に「戦没者を思いやる余裕」⁴⁾が生じ、「遺族や生き残った戦友たちを念頭に」⁵⁾書かれるという側面が生ずるようになることを高橋は指

摘している。戦記は執筆者の体験を語るだけでなく、「肉親の消息を尋ねるかたちの読まれ方も」あり、「あまりに悲惨なことや忌まわしいことは、自分たちの胸におさめて」⁶⁾おく内容が定着していくようになる。

ところが、20世紀の終わりを迎えるころになると、事実をありのままに伝えることが慰霊であるように記述内容が変化していく。2001年に刊行した川崎春彦『日中戦争一兵士の証言 生存率3/1000からの生還』の文章はその一例である⁷⁾。

戦争体験者は老境に入り次第に減少する昨今、平和の有難さを是非後世に伝えようと微かな記憶を辿り、地図と資料を見ながら数回追加や修正を重ね、ようやく完成した世に問う生の叫びを次世代を担う若者に是非熟読理解して欲しいと願うものである。

(川崎2001:229)

川崎は、部隊の公式な記録や戦地の地図などを照合して執筆している。著者たちの年齢は80歳を超えた状態である。体力的にも厳しさを増す中での執筆は、山岸治夫が『個人の生活史研究の意味』の中で指摘する「個人がその社会生活において、自ら、しないではいられない行為の目標、そうすることが直接自己の人生を生きることになる目標」⁸⁾となる、資料としての戦記の持つ意義が浮上する。

こうした中、平成19年(2007年)、NHKは『証言記録 兵士たちの戦争』の放送を始める。吉田裕は『兵士たちの戦後史』のなかで、収録にあたったディレクター太田宏一の言葉を次のように紹介している⁹⁾。

最前線の戦場で戦った元兵士の方々が、以前と比べてインタビューに応じていただきやすくなったことです。(中略) 凄惨極まりない戦場の記憶は、体験者の心に深い傷を残します。ま

た、自分一人生き残ったことに強い負い目を感じている方もいます。そのため、戦場体験を家族にも語ったことのない人が多く、以前は、取材のお願いは難航することが常でした。長い沈黙を破って証言していただいた方の一人が、「死ぬまでに話しておいてよかった。肩の荷がおりた思いがする」という趣旨のことをおっしゃっていたのを記憶しています。人生の最晩年を迎え自分の体験を語り残したいと考え始めている人たちの存在。それが、彼らの言葉を記録として残そうと私たちが考えた最初の大きな理由です。(吉田a 2011:270 出典:太田 2009:309)

戦争体験は戦後の70年間の社会や個人の営みにどのように影響を与えてきたのだろうか。分析にあたって、修士論文作成時に収集したデータ、しょうけい館(戦傷病者史料館:東京都千代田区)が所蔵する2000年初頭に書かれた戦記の記述を利用していく。

2. アジア・太平洋戦争の姿

アジア・太平洋戦争では、前述のように310万人の死者を出している。大量の戦死者を生み出した戦争であるとともに、空襲や原子爆弾などによる民間人の損害も大きかった。陸軍士官学校を卒業後中国戦線に配属された藤原彰は、2001年に刊行した『餓死した英霊たち』の冒頭に以下の文章を記し、旧日本陸海軍の組織としての責任を問うている¹⁰⁾。

栄養学者によれば、飢餓には、食物をまったく摂取しないで起こる完全飢餓と、栄養の不足または失調による不完全飢餓があるとされている。この戦争における日本軍の戦闘状況の特徴は、補給の途絶、現地で採取できる食物の不足から、膨大な不完全飢餓発生させたことである。そして完全飢餓によって起こる餓死だけでなく、不完全飢餓による栄養失調のために体力を消耗

して病気に対する抵抗力をなくし、マラリア、アメーバ赤痢、デング熱その他による多数の病死者を出した。(中略)そして、この戦病死者の数が戦死者や戦傷死者の数を上回っているのである。(藤原2001:3-4)

同書は大量の餓死者をもたらした要因として、補給無視の作戦計画、兵站軽視の作戦指導、作戦参謀の独善横暴の3点を指摘し、帝国陸海軍の特質として精神主義への過信、兵士の人権の軽視、兵站部門の軽視、幹部教育の偏向、降伏の禁止と玉砕の強要の5点を指摘している¹¹⁾。

こうした傾向をふまえ、吉田裕は『日本の軍隊』のなかで戦争の激化とともに、戦地から内地に送還される戦病患者の中に占める精神病患者の割合の上昇を指摘している。出典である『うずもれた大戦の犠牲者—国府台病院・精神科の貴重な病歴分析と資料—』(浅井利勇編著1993年)によると、日中全面戦争に突入した翌年の1938年には、内地に送還された63,007名の2.42%が精神病の診断を受けている。44年の1月から4月の期間には14,145名の兵士が内地に送還され、このうちの22.32%が精神病であった¹²⁾。

戦地に送り出された人数に比べ、内地に送還された人数はごく限られており、当時の精神疾患への理解を考えると、こうした数字の奥に多くの「戦争神経症の患者が、そのまま放置されていた可能性が高い」¹³⁾ことを吉田は指摘している。しかし、それが氷山の一角に過ぎないとしても、内地に送還された精神病患者の比率が高まったことは、補給が不十分であり、死と隣り合わせの戦線が広がっていることを傍証するものであると考える。

また、前述した藤原は兵士に対する人権を軽視した結果として、士官と兵士を比較すると、兵士の生還率が著しく低い傾向を指摘している。藤原がとりあげた南洋の島メレヨン島では、将校183人中126人が生還できたのに対して、下士官の生還者は515人中185人、兵士の生還者

は3205人中786人であった。生還率は将校77%、下士官64%、兵士18%である¹⁴⁾。下級者により厳しい環境である。

その戦場をビルマ戦線で敗戦を迎えた小田敦美は次のように述べている。

(戦友の火葬の場面で)その内なんともいえない臭いが鼻をつき気持ちが悪い。(中略)だいぶ時間が経過したので臭いのを我慢して行ってみると内蔵が焼けきらずジュウジュウと音を立てていた¹⁵⁾。(小田2001:185)

復員後岡山県庁に勤務した小田は、イラク戦争が始まった後、県内各地で講演活動を行ってきた。小田の著書の一節にある「戦争の生の姿を知っていただき」と記述している。小田の行動は、タモツ・シブタニの『パースペクティブと準拠集団』の中で次のように説明することができる¹⁶⁾。

ある人間の行動の一貫性は、その人の組織化されたパースペクティブの観点から説明され得る。いったん人間がその人の集団から特定の見地を取り入れると、それはその人の世界に対する適応方針となり、また、その人はこの準拠枠をあらゆる方向に向けることになる。

(シブタニ 1955=2013:7)

シブタニは、パースペクティブを「人間の自らの世界に体系化されたものの見方」¹⁷⁾と定義し、準拠枠を形成する集団について「規範の内面化通して生ずる」¹⁸⁾ものとしている。戦争体験を、準拠枠を形成する集団ととらえると、著者たちの「人間の自らの世界に体系化されたものの見方」が戦後の日本社会を形成したものと考えられる。では、それはどのようなものだろうか。

3. 読み取ることのできる パースペクティブ

①指導者への不信と怒りに支えられた 平和主義

前述の藤原は、『餓死した英霊たち』を次のように締めくくっている。

そもそも無茶苦茶な戦争を始めたこと自体が、非合理的な精神主義、独善的な攻勢主義にかたまった陸海軍のエリート軍人たちの仕業であった。そして補給輸送を無視した作戦第一主義で戦闘を指揮し、大量の餓死者を発生させたことも彼らの責任である。無限の可能性を秘めた有為の青年たちを、野垂れ死にししかいような無惨な飢え死に追いやった責任は明らかである。(藤原2001:234)

藤原は戦後東京大学で歴史学を学び、戦争史研究の先達のひとりとなった。戦争の実像を通して帝国日本への批判を上記の文章などから読み取ることができる。藤原の「体系化されたものの見方」は当時の指導的立場への批判という点で一貫している。

とりわけガダルカナルやインパールなど「生きている者は必要な衣服や装備を、死んだ者から奪い取る」戦場から帰還した渡辺英一は、不合理で勝ち目のない戦いを強いる軍の上層部に批判のまなざしを向け、戦術にあきれている。渡辺の記述を表1に示す。

渡辺は東洋大学を卒業し、現役兵として入隊した後に予備士官学校に入る。最前線の指揮官としてガダルカナル撤退後ビルマ戦線に投入される。戦後は大日本報徳社の活動に傾倒する。アジア・太平洋戦争を「聖戦」と表記しているが、平和な社会を志向することや軍組織への厳しい評価を読み取ることができる。

下士官であった真貝秀広は『ビルマ戦記』に「斥候に出て：まだいくらも行かぬうちに地図とぜんぜん違って、至る所に雨季のために激流があり(中略)司令部に引き返した。すると参

表1 渡辺英一『ガダルカナル死闘の果てに』の記述から

○補給のない戦いのなかで

なにしろ補給がないのだから、生きている者は必要な衣服や装備を、死んだ者から奪い取るしかなかったのだ¹⁹⁾。

○作戦への疑問

行方のわからない連隊旗を探し出さなければ、指揮官としての面目が立たない。そう考えた那須少将は、どうみても勝ち目が無いのを知りながら、予備隊として待機させてあった16連隊を(攻撃に投入した)²⁰⁾

○戦後社会へのメッセージ

平和で豊かな世界を作るために聖戦を戦い。命を落としていった多くの戦友の死を犬死、無駄死にとさせないためにも、(中略)人類が平和で豊かに共生できる世界づくりこそ、現代を生きる私たちの使命ではないだろうか²¹⁾。

(渡部 2004:69, 49, 80)

謀長にどなりつけられた²²⁾ことを書き残し、「もう二度とあのような惨めな戦争は繰り返すことのないよう、いつまでもいつまでも平和でありたいものと心より願ってやまないものである。」と結んでいる。平和を求めると軍指導部への批判が結びついている。

表2は調査対象とした戦記の中から軍組織の不合理さ、不誠実さ、不合理さの記述と戦後社会を評価する文言を読み取り、表にまとめたものである。これらの文章は戦後60年以上を経て書かれているものである。「戦後社会への評価」の内容は戦争体験という準拠枠によって形成された体系化された視点と考えられる。記述を読み進めると、「権力者、政治家は、決してその殺し合いの場面に出てこない」、「軍隊というのは一人歩きする」、「エリート参謀たちの根拠なき自己過信傲慢な無知、底知れぬ無責任が国

表2 軍組織の不合理さ、不誠実さ、不合理さの記述と戦後社会を評価する文言

	書名	著者	配属先	軍隊の組織・作戦への評価	戦後社会への評価
1	働いてちょっぴり楽しんで先輩たちの物語 樺太での経験が生きる道に	金淵長松 2005年 苫小牧民報	満州	昭和20年も8月初めころになると、われわれにも「何だか危ないようだな!」という感じが伝わってきました。まず、将校官舎の家族が移動を始めたのです。 p. ⑧	戦争のプロに育て上げた兵隊を殺し合いの場面に追い込んだ権力者、政治家は、決してその殺し合いの場面にでて来ない、後方にいるのです。 p. ⑩
2	働いてちょっぴり楽しんで先輩たちの物語小隊長が逃げた!	菅原光雄 2005年 苫小牧民報	満州	山野を逃げている途中にも悲惨な光景を見ました。たくさんの人が通った跡があったので(中略)歩いていったところ、道端に小さな子供が何人も死んでいたのです。(中略)逃避行を続けていた民間人たちが、逃げるときの手まといになるからと捨てたのだと思います。 P. ⑩	国家ということ考えた場合、日本を狙っている国がある以上、防衛力は持つべきではないかと思うのです。ただ軍隊というものはともすれば一人歩きをするのです。これをさせないための文民統制…これをどこまで守れるか。 p. ⑩
3	最後の初年兵 3千キロ死の行軍	黒田千代吉 2002年 文芸社	中国	われわれの上層作戦本部は、本隊追及のみの作戦で、糧秣の補給、医薬品、医療、兵の体力等考慮せず、無謀にも命令を発し…… p. 195	戦後半世紀あまりのときの流れと平和繁栄の中で戦争の反省を決して忘れてはならない。 P.195
4	私の戦記	池間昌市 2005年 新風舎	中国・ガダルカナル	私は戦傷、風土病、マラリアだけでなく飢えて衰弱し、歩行もままならない状態のとき、「第2機関銃中隊長」と「第5中隊長」となっていた。大隊長も連隊長もいないのに一体どこの誰が命令しているのか全くわからなかった。それに機関銃のない、戦える兵隊の居ない中隊ってあるだろうか…… p. 51	エリート参謀たちの根拠なき自己過信傲慢な無知、底知れぬ無責任が国を滅ぼすという事実である。 P. 51
5	南の島の光と影	沖 雅雄 2001年 新風舎	パラオ	日本の軍隊は、痛さ苦しさに絶えることが人間形成のすべてとかがえていたらしい(中略)日本にはこれといって目新しい兵器はない。 p. 76	日本は平和を守り種々の争いをあらゆる手段で解決する努力をしています。 p. 4

6	慟哭の島よさらば	関根欣幸 2003年 文芸社	キスカ 占守島	焼土の東京に戻って：近代戦の常識として、民間人の犠牲を極力少なくするように努めているはずなのに。 p. 164 これらの制裁は軍人魂を養うのにどれほど役立ったのだろうか。逆に上官の傍若無人の振る舞いが、兵の心に蟠り、(中略)上官の命に従わず勝手な行動に出ることもあった。 p. 56	戦争体験者の戦争観は、既成の事実を直視し、過去を反省することを忘れない。戦後生まれの人には戦争責任がないとはいえ、日本人として無関心でよいということではない。 p. 165
7	機動部隊の栄光 艦隊司令部信号員の太平洋海戦記	橋本 廣 2001年 光人社	ミッド ウエー	国民に対し、ミッドウエー海戦の事実を隠蔽するため、沈没各空母の乗員は(中略)館山、木更津、鹿屋など各航空隊のような辺鄙なところの部隊を選んで揚陸され、缶詰にされた。 p. 174 連合艦隊首脳は、この敗戦の事実に対し、ただの一回の調査研究も行っていなかった。 P. 176	戦争を放棄する新憲法の下に鋭意努力して今日の繁栄を築き上げた。 p. 301

を減らすという事実という軍組織を批判する言葉、「戦争を放棄する新憲法の下に鋭意努力して今日の繁栄を築き上げた、「日本は平和を守り種々の争いをあらゆる手段で解決する努力をしています」など平和主義を支える自負も読み取ることができる。

日本の平和主義、日本国憲法を守る力は、戦争体験者が抱く軍上層部や政治家への不信感や怒りに支えられてきた一面をうかがうことができる。「指導者への不信と怒りに支えられた平和主義」をパースペクティブの一つと考えたい。

このパースペクティブを考える際、表3に示す戦後社会を評価する言葉に留意する必要がある。表2と比べると、戦後の民主主義に対して距離を置いた記述である。

こうした記述の一方、奥は執筆の動機として

として「5・15事件、2・26事件の前夜を思わせるような不安な気がするのは自分だけであろうか」²⁶⁾と述べている。また、城は長沙城攻略戦に参加し、「私はこの作戦に臨んで不思議に思ったことがある。それは地図の支給がなかったことである。(中略)少なくとも小隊長以上には地図は絶対に必要だと私は思うのであるが」²⁷⁾と作戦の指揮に疑問を抱いている。福田は「特攻作戦を進めた海軍の某将官は、さいごの特攻作戦で出撃し、陸軍の責任者の某将官は英霊の御霊を弔うと称して腹も切らず、悠々自適の生活を送ったという」²⁸⁾と陸軍の特攻作戦の責任者を批判している。

城は復員後高校の社会科教員となる。昭和39年(1964年)、文部省は生徒指導研究推進校を設置する²⁹⁾。城の勤務校もその一つとなり、城は新設された生徒指導主任となる。新設間もな

表3 戦後の民主化への懐疑の記述から

- 奥隆行(インドネシア南方軍司令部付主計将校1942年応召 戦後は郵便局員)
戦後アメリカは(中略)「平和憲法」と「教育基本法」を定め、(中略)これに便乗するいわゆる進歩的と称する反日本人の跋扈と、反日メディアに牛耳られ²³⁾…
- 城武信(1942年応召し、久留米予備士官学校に入学 中国大陸を転戦 戦後は高校教員)
民主主義を利己主義と混同しないでもらいたいと思うし、個人の命の大切さを十分に踏まえたうえで、国の存立と安定、そのうえの平和を心から願うものである²⁴⁾。
- 福田禮吉(1944年志願して入営 ロケット戦闘機実験隊に所属 戦後は中学教員)
権利と義務のうち、自分がなすべき義務などは消去して否定し、それが自由だと考えてきてしまった²⁵⁾。

い分掌に城はカウンセリングを行うことのできる環境を整備していくが、校長と対立し通勤の困難な職場へ異動させられることもあった。

「教育界の中の不合理性は教育の場であるだけに特に許し難い。人間の集合体とは、何時、何処でもこんなものかと思った。」(傍点篠原)³⁰⁾と、平成25年(2013年)に所属する日本カウンセラー協会の会報に書き残している。組織や上司に冷たい視線を投げかけている。

表3の3名は大学・専門学校に在学、卒業し、将校となった。奥は司令部の本部に、福田は内地の部隊に所属していた。部隊所属や階級、戦場の違いが戦後社会への評価までの違いに結びつく可能性を捨て去ることができない。城は教育委員会や管理職に対して不信の目を向けている。復員後に始まった新しい生活、新しい立場の中でも、自分の所属する組織や社会に不信の目を向ける姿勢は、戦争体験者に共通するパー

スペクティブであるものと考えられる。

②非人道的な行為を自省する

これまで述べてきたように、近年の戦記には正確な描写に心がける傾向が見られる。加害のとりわけ一般人や捕虜の殺害についての記述も見られる。そうした中、マレー半島のタイピンでの華僑虐殺を目撃した憲兵の関道介は「兵士の目は血走りもう人間の目ではない」³¹⁾と書き残している。加藤清高は捕虜の刺殺を次のように記している。

捕虜に円匙を与えて穴を掘らせ、後ろ手に縛った縄を解き、捕虜を穴の前に立たせ、銃剣で刺殺するのだ。(初年兵を集合させて刺殺する場面)³²⁾ (加藤2004:58)

中国大陸に駐留するなかで、“調達”が行われた。1000人中3人しか帰還できなかった部隊に所属した川崎春彦は“討伐”による食料調達の場面を次のように述べている。また、藤崎武雄は現地の人間を徴発して荷物の運搬にあたらせることを記している。

材料は家で放し飼いの鶏か豚を捕らえて、近くの畑からとった野菜とともに、炒めるか、ごった煮にすることが多かった³³⁾。(川崎2001:69)

補給のできない地方を通過するときは、予備の食糧携行のために、地方住民を苦力として集め、かれらの背に予備の食糧を担がせて行軍をつづけていた³⁴⁾。

(藤崎2002:338)

こうした行動は当然のように敵を増やす。それに対して怒鳴ったり殴ったりする。その一方で、神出杉雄の部隊のように中国人に対して手荒な行動をとらなかったことも記されている。部隊ごとの行動の差をうかがうことができる。

日本の兵隊たちに至っては、中国人の動作がのろいと言っては、すぐにカッカして怒鳴りつけたり、殴ったりする。こういったようなことが、日本人に対する中国人たちの協力を著しく阻害しているというのだ³⁵⁾。(神出2003:67)

三好禮市も村人との関係を以下のように述べている。捕虜の射殺命令の記述があるが、三好は命を助ける。こうした捕虜や村人を殺害する命令に密かに抗する者もあったことも確認できる。三好の行動の後、部隊は集落の人びとの接待を受けている。

敵性部落を攻撃すると：村人たちが右往左往していて、どれが村人でどれが八路軍の弁衣兵か見分けがつかない。(中略) 家宅搜索をするとき小銃が出てきたりする。結局、そこにいた人たちを全て敵として扱わざるを得なくなる。(中略) 実は全員が村人であって、八路軍はとくに住民を残して次の部落に逃げ去った後だ³⁶⁾。

捕虜の射殺命令に対して：この時、ふと考えた。何で無抵抗な人間を殺さなければならんのか。よーし、これだけ小隊と離れていたらわからない。(中略) 銃を10メートル先に向けて発射した。同時に下士官を足で押し倒した³⁷⁾。(三好2004:76,86)

益田豊は軍隊の残虐性について次のように述べている³⁸⁾。そして、戦場での体験を公にすることが「時の流れに乗って事実を消してはならない³⁹⁾」と書き残している。体験を伝えることに自身の使命を見いだしている。

私は親しくなっていた近所の農民たちを逃がしてやろうと思い朝早く起きて近所に5,6軒かたまっている農家に行ってみて、腰が抜けるほど驚いた。というのは、庭のあちこちに首を切られて殺されている農民の死体が17,18体転

がっていて、その中には女と子供の死体があった⁴⁰⁾。(益田2004:101)

戦争体験、ことに派兵された先での非人道的な行為は、戦後長らく押し殺されてきた。保坂は『戦場体験者—沈黙の記録—』の中で「四、五歳の子どもを見ると自らの中国戦線での行為が急に思い出されてきて、正視できなくなってしまうケースなどは実は私も数多く聞かされた」と述べている⁴¹⁾。

戦後抱き続けてきた非人道的な行為に対する自省の思いをケアするしくみは公的に存在しない。そのために高度経済成長期に発展した戦友会には「戦場体験という非日常の不条理を(中略)仲間どうして助け合っている⁴²⁾」という側面も見られた。その戦友会も21世紀に入ると高齢を理由に解散していく。こうした背景のもとで書かれた文章に見られる非人道的行為への自省の念は、戦後の社会生活に突き刺さったもう一つのパースペクティブであると考えられる。

4. 2つのパースペクティブと戦後社会

図1は修士論文作成時に調査対象とした戦記の著者の生まれた年を表わしている。著者は1918年から22年生まれが大半である。昭和15年(1940年)前後に徴兵検査を受け、入隊する。そして、20代前半を戦場で過ごすこととなった人たちの戦後の歩みでもある。表2で紹介した関根の隊内での理不尽な制裁や橋本の経験したミッドウエーでの敗戦の隠蔽など多くの理不尽な経験を経て復員した人たちは、戦後の社会生活の中で民主政治、平和憲法、文民統制を支持している。

NHKは「日本人の意識調査」を定期的に行っているが、アジア・太平洋戦争に従軍した年代は政治に対する有効性感覚のスコアが他の年代と比べて高い傾向にある⁴³⁾。軍組織、とりわけ

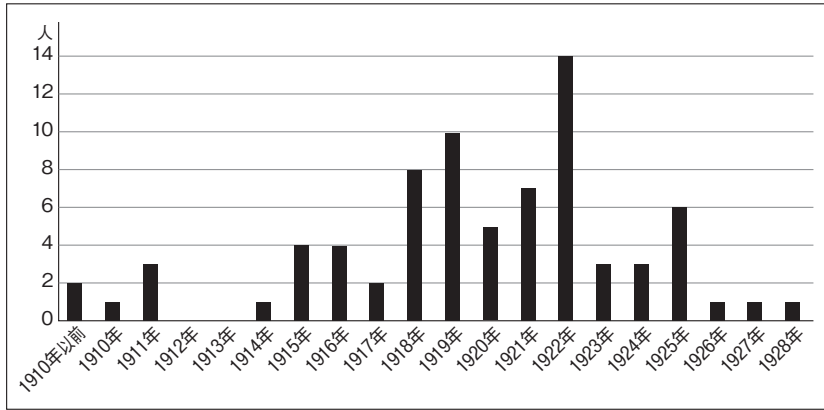


図1 調査対象とした戦記の著者76人の生れた年

多くの兵士が投入された陸軍への不信感をバネに戦後の社会がつくられてきたことを物語っているのではないだろうか。

その一方で、戦争体験者の多くは様々な死を目の前にしている。現地の人、味方の部隊を問わず目の前の命が奪われることも経験している。

捕虜に円匙を与えて穴を掘らせ、後ろ手に縛った縄を解き、捕虜を穴の前に立たせ、銃剣で刺殺するのだ⁴⁴⁾。(初年兵を集合させて刺殺する場面に立ち会う) (加藤2004:58)

見習士官が：部落にまき集めにいった時、反抗した農民の男性を二人連行してきて(中略)「日本は戦争に負けてしまったが、この正宗はまだ一滴の血も吸っていない」と連れてきた二人の農民の首を切った⁴⁵⁾。(小俣2003:25)

まだ生きているうちに注射で殺した例は病院ばかりではないようであった。敵の急迫を受け、どうしても歩けない患者や捕虜となるか、自決する以外にはなかった。自決する力もない患者や重症兵に対する方法はこの青酸カリであったと聞かされていた⁴⁶⁾。(川内2004:110)

こうした体験を抱えた人たちは、保坂正康によると、「日々の安寧の中に身を置くと、その次に必ず『自分の一生はこれでいいのか。あの戦場体験の過酷な思い出を語り継がずに死んでいいのか』と自問自答するようになる。」⁴⁷⁾という。冒頭に示した山岸治夫が『個人の生活史研究の意味』の中で指摘する「個人がその社会生活において、自ら、しないではいられない行為の目標、そうすることが直接自己の人生を生きることになる目標」⁴⁸⁾につながるものである。

近年、アジア・太平洋戦争の不都合な事実を見つめることを「自虐史観」とする風潮がある。この論者は、日本国憲法に基づいた現在の社会のあり方を否定的にとらえる人たちでもある。昭和から平成の初頭まで、そうした論調が表面化しなかったことと戦争体験者の多くが存命であったことは関係が深いものと考ええる。戦争体験者の2つのパースペクティブが世論の形成などの面で歯止めをかけていたと考えられる。

アジア・太平洋戦争の事実となる記録は、敗戦時に焼却処分されているものも多い。また、戦争体験者が自身の記憶を封印してきたこともある。その意味で戦争体験者—「一番ワリを食つてゐる」⁴⁹⁾人たちの発言を検証していくこと

は、「平和で民主的な国家及び社会」⁵⁰⁾を形成するうえで重要度は高い。戦争体験者が抱いてきた“思い”までを含めて検証することは、将来へと続く一歩につながるものと考ええる。

それはまた日本社会の大半を占める戦争を知らない世代が引き受けていく大きな課題でもあると認識している。

注

- 1) 吉田裕 a 『兵士たちの戦後史』(岩波書店) 2011年p.272
- 2) タモツ・シブタニ 『パースペクティブとしての準拠集団』1955年 木原彩香他訳、鹿児島大学 p.5
- 3) 1963年5月14日閣議決定「戦没者追悼式の実施に関する件」による
- 4) 高橋三郎 『戦記ものを読む—戦争体験と戦後日本社会—』(アカデミア出版会) p.54
- 5) 高橋前掲書 p.55
- 6) 高橋前掲書 p.57
- 7) 川崎春彦 2001年 『日中戦争—兵士の証言 生存率3/1000からの生還』(光人社) p.229
- 8) 山岸治男 1983年 『個人の生活史研究の意味』大分大学教育学部紀要『教育科学』6-5 p.114
- 9) 吉田前掲書a p.270 出典は太田宏一「おわりに」NHK「戦争証言」プロジェクト 2009年『証言記録兵士たちの戦争②』(日本放送協会) p.309
- 10) 藤原彰 2001年 『餓死した英霊たち』(青木書店) p.3～p.4
- 11) 藤原前掲書 p.142～p.227
- 12) 吉田裕 b 2002年 『日本の軍隊』(岩波書店) p.217
- 13) 吉田前掲書 b p.217
- 14) 藤原前掲書 p.96 出典は『戦史叢書・中部太平洋陸軍作戦(2)』p.579
- 15) 小田敦美 2001年 『恩愛をいただいて』(自費) p.185
- 16) シブタニ前掲書 p.7
- 17) シブタニ前掲書 p.5
- 18) シブタニ前掲書 p.8
- 19) 渡部英一 2004年 『ガダルカナル死闘の果てに』(文芸社) p.69
- 20) 渡辺前掲書 p.46
- 21) 渡辺前掲書 p.80
- 22) 真貝秀広は『ビルマ戦記』p.122
- 23) 奥隆行 2004年 『南方飢餓戦線 一主計将校の記』(山梨ふるさと文庫) p.250
- 24) 城武信 2004年 『私の従軍体験記 生と死の狭間をゆく 第1部 萬朶の櫻』(文芸社) p.318
- 25) 福田禮吉 2002年 『或る陸軍特別幹部候補生の一年間 ロケット戦闘機<秋水>実験隊員』(文芸社) p.296
- 26) 奥前掲書 p.4
- 27) 城前掲書 p.87
- 28) 福田前掲書 p.296
- 29) 文部科学省ホームページ『生徒指導関係略年表について』(2019.8.14取得)
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/04121504.htm
- 30) 日本カウンセリング協会 ニューズレター第6号(2019.8.14取得) 2013.5.31
<https://nihonncounsel.jimdofree.com/>
- 31) 関道介 2002年 『生も死も 波瀾万丈戦争の裏街道で戦った破天荒な男の物語』(文芸社) p.67
- 32) 加藤清高 2004年 『わが青春は戦場にあり』(新風舎) p.58
- 33) 川崎春彦 2001年 『日中戦争—兵士の証言 生存率3/1000からの生還』(光人社) p.69
- 34) 藤崎武男 2002年 『歴戦1万5000キロ大陸横断一号作戦従軍記』(中央公論新社) p.338
- 35) 神出杉雄 2003年 『大陸戦線こぼれ話 中島隊の軌跡』(文芸社) p.67
- 36) 三好禮市 2004年 『太平洋戦争十七少年奮闘記』(新風舎) p.76
- 37) 三好前掲書 p.86
- 38) 益田豊 2004年 『従軍と戦中・戦後』(文芸社) p.101
- 39) 谷本光生 2001年 『運命と偶然—私の軍隊生活—』(文芸社) p.233
- 40) 神出杉雄 2003年 『大陸戦線こぼれ話 中島隊の軌跡』(文芸社) p.67
- 41) 保坂正康 『戦場体験者—沈黙の記録—』(筑摩書房) p.218
- 42) 保坂前掲書p.110
- 43) 「日本人の意識・40年の軌跡(2)」高橋幸市・荒牧央 『放送動向と調査』2014.8
- 44) 加藤清高 2004年 『わが青春は戦場にあり』(新風舎) p.58
- 45) 小俣佐夫郎 2003年 『残留 日中友好への誓い』

(光陽印刷) p.25

46) 川内太郎2004年『ビルマの土』(文芸社)
p.110

47) 保坂前掲書p.132

48) 山岸前掲書p.114

49) 吉田前掲書a p.86 (原典は安岡章太郎「モ

テない戦中派」『文芸春秋』1956年5月)

50) 教育基本法第1条

(しのはら まさし

甲府市立南中学校教諭)